幕が下りてから

安岡章太郎

講談社文庫
A22

講談社文庫

幕が下りてから
安岡章太郎
昭和46年7月1日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京　3930
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　加藤製本株式会社

© Shotaro Yasuoka 1971
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

談社文庫

幕が下りてから

安岡章太郎

講談社

目次

幕が下りてから　七
解説　遠藤周作　二七一
年譜　二八三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

幕が下りてから

おれには何でもが見えている、と永野謙介は女物の紫矢絣の袖口が手首にまつわりつくのをズリ上げながらつぶやいた。暑すぎるせいで、頭の中はボンヤリしている、しかし見えることは何でもが、じつによく見える。

初舞台のときには誰でも、自分が何をやっているのか、しゃべっているのか、ただ夢中で、客席など眼に入らないものだという。謙介も、いわば常識的にそう心得ていた。ところが、いまはこの常識があんまりアテにならないことに、かえってマゴつかされる気持だった。正面から向かってくる何本もの照明が直接眼に入りでもしないかぎり、一階、二階は無論、どうかすると三階席のかなり後列の客がとなり同士で何かささやき合っているのさえ判然と見別けられる……。ひとつには、これは自分が職業的な役者ではなく、べつに舞台でトチったってかまわない、と思っているからだろう。

「どうも、この文化人歌舞伎というのも麻薬みたいに、いっぺんやると病みつきになって、毎年、時期がくると何かこうソワソワしてきて、仕事もサッパリ手がつかんようになりますなア」

けさ楽屋へ入ったときから、誰彼なしに相手をつかまえては、そう繰り返えしていた童話作家

の土屋豊喜は、鏡台のまえに並らんで坐ると、謙介にも同じことを言った……。別段、それが嘘だとは思いたくはなかったが、まる味をおびた童顔の土屋氏が、妙に脅えたような眼のまわりに微笑をうかべながら、「芝居がはじまると思うと、もう出たくて、出たくて、どんな端役にでも思って、ねえ」と、どこか子供に話し掛けることが職業的な習性になってしまったような口調で言うのを聞いていると、謙介は、この老齢の童話作家がどんなに芝居好きかということより、いつかこの文化人歌舞伎の出演交渉を受けなくなる日のくることを、内心でどれほど惧れているか知れやしないんだ、と想ってみずにはいられなかった。民間放送TRVが毎年、開局記念の行事にしているこの芝居は、親会社のS新聞の後援で戦前から行われていたものだが、民放開始当時に試験的に公開番組の電波にのせてみたところ、意外に人気をよんで、たちまちこの局の名物番組になってしまった。そしていまでは、一民間放送局の催しというより、ジャーナリズムを上げてのお祭り騒ぎめいた活況を呈しており、これに出演者として名をつらねることは、その方面での彼等の評価を位置づけるメヤスにもなりかねない勢いになった。すくなくとも、いったんこれに出演しながら、次の年に出ないとなると、一体あいつはどうしたんだろう、といった疑惑を多少とも招くことにはなる……。その意味では、たしかにこれは土屋氏の言うとおり「いっぺんやると病みつきになる」にちがいなかった。

「ところで、永野くん、あんたはこれが二度目、いや三度目でしたかな、この芝居に出るのは……」

土屋氏は、鏡の中の謙介の顔を覗きこんで、ふとトボけたように問い掛けてきた。

「いえ、ことしが初めてです。じつは去年も出てみないかという話は、あるにはあったんですが、ちょうどオフクロが死んだりしたあとで、家の中がゴタゴタしていたものですから……」
「ほう、お母さんが亡くなった、おいくつで？」
「六十一、でした」
「ほう六十一、それはそれは、まだお若いのに……。いや、ぼくなんざ自分じゃ若いつもりでいるんだが、あんた方から見りゃ、ずいぶんのじじいなんでしょうなア……。やっぱり若い人でなくちゃ、女形はやらせてくれないんだ。ぼくは、この芝居は開局以来の常連で、ことしはもう七度目なんだが、まだ一度も女形なんてムツかしい大役はもらったことがない」
鼻の下に黒い大きな八字ヒゲを貼りつけながら、そんなことを言っていた土屋氏は、金モールの帽子をかぶると、立ち際にもう一度、繰り返した。「初舞台が女形とは、こりゃあんた、よほど見込まれたんだな」
イヤ味だろうか？　丸い頬や、眼尻に、どこかアドケない様子の残っていた土屋氏の顔が、警官の制帽をかぶったとたんに、いかにもそれらしくキビしい表情になったのに驚きながら、謙介は鏡の中の自分の姿を見なおした。お下げ髪のカツラ、臙脂色の袴、爪先の尖った編上げ靴……。明治時代の女大学生というのが、謙介に振り当てられた役だ。どうして自分がこんな役を演じるハメになったのかはわからない。ただ、これが「ムツかしい大役」としての女形でないことはたしかだった。それに「若い」といわれたことも、ことし三十七歳、数えなら再来年は四十になる謙介は、かえって完全に中年男になった自分の年齢を、いまさらのように意識させられた。もっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto

とも数年まえに在野の美術展に初めて出品した画で、その年の新人賞をうけ、それがたまたま或る雑誌の編集長の眼にとまったことから、表紙絵やカットなどをかかされているうちに、なんとなく画で食えるようになったのは、正規の過程で画を勉強し、画壇の序列のなかで自分の画の売れるのを待っているような人たちからみれば、トントン拍子の売れっ子ということにもなるだろうし、そんなことから、若いくせに、売り込みだけは一人前以上だなどと言われていることは、謙介自身もよく承知している。このごろでは絵だけでなしに随筆めいた雑文をあちこちへ書いてみたり、テレビやラジオで風俗時評ともつかぬ掛け合い漫才みたいなものに出たりもして、何が本業かわからぬことをやって暮らしている。こんどの「明治時代の女大学生」という配役も、おそらくこうした謙介をそのまま戯画化したものにちがいなかった。

だが、そんなことに、あれこれこだわったのも、職人のつかう化粧刷毛が自分の肌に下されるまでだった。——水白粉をたっぷり含んだやつが最初に首筋に触れた一瞬、謙介は役者になった。ヒヤリと変に現実的な冷たさが、背を這うように全身に伝わり、頬骨の張った、巾広の顔を、みるみる真ッ白に塗りつぶして行くのを眺めながら、まるで他人の顔が自分の皮膚のうえに拵らえられるのを見ている気持だった。両頬にヒノマルのように紅を描いたところで、もう一度、鏡を覗いてみても、たしかにそれは誰のものとも見別けのつかぬ顔だった。(なるほど、おまえの頸は太い頸だな……)自分自身の顔に、つぶやきかけて謙介は、ふと二十年以上もむかし、学生時代の遊び仲間の一人から、同じことを言われたのを想い出した。「おまえの頸は太いなあ、そんなのをジンゲルの頸っていうんだぜ」言ったあとで、その男は「ジンゲルっていうの

はドイツ語で芸妓のことなんだ」と説明をつけ加えた……。暗い天井からぶら下った裸電球の灯りが、右往左往する人の動きでユラユラ揺れる鏡の中に、シャ熊のような髪にリボンを結び、袴の裾から黒い編み上げ靴の足を突き出した、見るからに奇怪な女が立ちはだかっている。その異様に太い喉仏のあたりに、突如、そこだけで生きものであるようなナマナマしさが漂っているのを感じ、謙介は思わず両手を自分の首筋に当てがったが、その瞬間、白塗りの太い頸はヌーと延び、空間を跨いで自分の両手に生温くはさまれていた。

ギラギラする照明燈にも眼がなれてくると、その温度と人いきれに煽られた空気の厚ぼったい重さとが、うっかりすると居眠りを誘われそうな気だるさを感じさせる。謙介は、頭を振ったり、唇を噛んだり、両手を握りしめたりひらいたりしながら、ときどき観客席の様子を逆に、こちらから眺め渡した。一階、二階の半分以上は招待席に当てられ、放送局や新聞社、出版社の関係者、知名の文化人やその家族が大勢つめかけている。

やっとフィナーレの音楽が鳴り出した。紙吹雪が散り、正面の背景が二つに割れて、そこから今夜のスタア連が繰り出して来る。その間、謙介たちは小旗を振り振り、足踏みしているという段取りだ。正面から、フランス士官の軍服をまとった青年作家の梶原や、鹿鳴館式の夜会服を着た女流詩人でシャンソン歌手の青木女史などが現れると、客席のあちこちから喚声や拍手が湧いて、その昂奮ぶりは映画スタアが登場するのと何の変りもない。事実、梶原は自分の小説を映画

化するとき自分が主演したりもするのだから、こうした反応は当然のことだった。彼等につづいて、画壇で最高の画料をとっていると言われている浮田薔風が、胸いっぱいに勲章をつけた海軍大将の礼服の上衣の裾をひきずるような恰好で登場すると、失笑ともつかぬざわめきが、そここに聞えた。それも美術記者や画商など、事情に通じた人たちの席ばかりではなく、二階、三階の一般客の席からも同じような声が起ったのは、ただの偶然というより、ここでは人が外貌だけで評価されているからにちがいなかった。美人画をかかせては当代随一と称される薔風も、アトリエでも展覧会場でもないここでは、小肥りの体をゆすって短い脚でチョコチョコと歩く、猫背の坐業職人でしかなかった……。勲章は薔風のたっての希望で、係りの局員や出入りの記者たちが、あちこち古道具屋などを駈けめぐって、すべて小道具ではないホンモノばかりを買い集めたということだったが、その重味に危く上体を前に倒しそうになりながら、股をひらいて懸命に両脚を突っ張って立っている薔風の姿は、謙介にも滑稽だった。しかし彼はそれを笑う気になれなかった。薔風の顔は額から、かたく結んだ上唇にかけて一面、汗に濡れて光っている。その苦しげな、しかも恍惚とした顔を見た瞬間、謙介は自分自身、都心の一流劇場の舞台の上で、たといどんな端役であろうと、こうやって大観衆に向い合って立っているということが、いかにも不思議な、とても現実のこととは思えない心持になってきた。実際、つい四、五年まえには、こんなことになろうとは夢にだって考えられたものではない……。その直後に謙介は、太腿や膝頭のあたりに何かが貼りついてくるような気がした。旗を振り振り足踏みしながら、なにかヒキツレるようなぎごちなさを感じ、反射的に誰かの視線がピタリとこちらに向けられているのがわかった。

おくさんが来ている……。

謙介は一瞬、心に影の射すのをおぼえたが、すぐにそれは人違いだろうと思いなおした。いまの自分は四、五年まえには夢にも考えられなかったようなことをやっているという、その連想がこんな錯覚を生んだものに違いない。急激に速くなる音楽に合せて、スポット・ライトがぐるぐる振り廻されると、舞台から見る客席はモヤが下りたようになる。彼は、もう一度さっきの顔をたしかめておこうと、交錯する光芒のモヤの向うに瞳をこらした。そして、横巾のひろい、色白の、その顔を探り当てると、ギクリとした。おれには何でもが見えている、たったいままでそう思っていた。自分が、どうしてこの顔に、いまのいままで気がつかずにいたのだろう？　実際それは、ほとんど彼の足元といっていい位置、ほぼ真向かいのカブリツキから二、三列目にあって、穴の底から覗くような眼で、じっとこちらを見上げていたのだ。それがおくさん、つまり奥田欽一氏の夫人睦子であることは、もう疑う余地もないことだった。動揺と同時に、突嗟に謙介がおぼえたのは或る落胆だった。別に何を期待するということがなくても奥田夫人の顔は、それ自体でひとをガッカリさせるようなところがある……。それにしてもどうして、こんなところに、こんなひとが来ているのだろう。ふだんから奥田氏は細君を人前に連れて出ることなどめったにないし、奥田氏自身の姿もこのごろは画壇の会合などではあまりに見掛けたことがない。奥田氏が自分で文化人歌舞伎など見に来たがるわけはなかった。見たがったのは細君の方にきまっている。いまも奥田氏は、睦子夫人の隣りの席で、居眠りでもするように、顔を腕組みした胸もとに埋めたままうずくまっており、細君だけが、白くて丸い大きな餅のような顔を仰向けて、

ぼってりした一重マブタの瞳を憑かれたように謙介の方へそそいでいる。それは一瞥して、彼等だけが周囲から取り残されているとわかるような、何がなしにイタイタしげなものを感じさせる二人連れだった。ことに謙介にとって、それは不意討ちであっただけに一層のことだ……。しばらくまえにも謙介は一度、これに似た不意討ちのイタイタしさを、別のところで、別のかたちで受けていた。或る盛り場の露地裏で、道傍の地べたに雑誌を並べているのを通りがかりに見掛けて、ふと眺めると、なかに裸の女たちにかこまれた中年男が、半裸にストリップの衣裳をつけて笑っているのが眼についた。どれもが精一杯の露骨を競って並んでいる表紙のなかで、とくにその肥った半裸の中年男の色刷り写真の表紙絵が他よりも目立ったのは、それだけが女より男の顔を正面に大きく出していたせいだろうが、謙介は何気なく傍へ近よって、あらためてその表紙を見てみようと覗きかけながら、おもわず中途で眼を外向けた。そのデップリ突き出した腹だの胸だのに花びらやら何やら銀紙細工を貼りつけて、いかにも脂ぎった中年男を誇張したどす黒い笑顔を見せているのが、じつは奥田氏であることを認めたからだ。いったい、なんで奥田氏がこんなことをやっているのか、またこの雑誌がどうして奥田氏にこんなことをやらせたのか、そこにどんな事情や理由があるのかは、わからなかった。ただ謙介はそのとき、妙に血なまぐさいものでも見たような、怕さと、イタイタしさと、そのくせ自分の不潔な利己心をクスグられる快感と、そんなものが一緒くたになって、ひどく困惑させられた……。いま観客席の椅子に、脱ぎ棄てられた厚手の外套のように、うずくまった奥田氏の体軀にも、あのときのイタイタしげなものは残っており、ことによればそれは謙介一人の印象ではなく、この劇場に来合せた画壇文壇の人

たちのなかで奥田氏のことを多少とも知っている人なら、誰でもが感じていることなのかもしれない。すくなくとも、奥田氏がこのごろ、こうした会合にめったに姿を見せなくなったのは、氏自身がそういった空気を肌身でなんとなく察知しているからにちがいない。このなかで、そんな奥田氏のイタイタしさに誰よりも無関心なのは、おそらく細君の睦子夫人だろう。

相変らずだな、謙介は、奥田夫人のまるで美容院の釜から鋳型でぬいたばかりのような頭髪や、ずんぐり盛り上った肩からエリの合せ目にかけて、なんとなく体つきとはチグハグな、うすねずみとも何ともつかぬ漠然たる色合いの和服姿を、舞台の上から見下ろしてイラ立たしげにつぶやいた。――おそらく、このひとには夫の悩みも周囲の冷たさも、何一つわかっていない。そういうトンチンカンなところが、この髪型や和服の着こなしにも現れている。むろん彼女は、この程度にめかしこむにも、彼女なりにずいぶん苦心して、たぶん何日も前から今晩のために努力したにちがいない。簞笥のヒキダシを一日に何回もあけたてして、同じ着物をひっくりかえし、とっくりかえし胸に当てて鏡を覗いたり、貯金箱からありったけの銅貨をさらえて勘定し直し、これで新しい足袋をコッソリ買っても大丈夫だろうかと思案したり、やっぱり古いのをよく洗濯してみようかと考えたり、そんな苦労を、つんでは崩す積み木あそびのように、数限りもなく試みたことだろう。奥田氏を、今晩ここへ出て来るように納得させるまでには、どんな手だてが使われたものかわからないが、結局のところ彼女の、同じことをどれほど繰り返えしても倦きるということのないシンネリムッツリした根のよさに、奥田氏は負かされたのだろう。それは単に根気が強いというのではなく、その根気が何に対する執着から起ってくるのか、彼女以外の人間に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erto